

書籍：「典子44歳 いま、伝えたい」を読んで

娘が買ってきた「典子44歳 いま、伝えたいー『典子は、今』あれから25年ー」を
ちゃっかり先に読んだ。年配の方は若い頃に、映画「典子は、今」を見方も多いと思う。
私も映画を見たが、サイリドマイドで両手を失いながらも、海に果敢に飛び込んで泳ぐシ
ーンだけを、なぜか今も鮮明に覚えている。

19歳の時に主演した映画の中の障害者である「典子」が一人歩きすることに疑問を感じ、
一切のマスコミとの接触を断って一人の女性として歩むために「のり子」と名前の表
記も変え、結婚後も勤めをしながらも2人の子どもの育児をし、ご主人、母親にも支えて
もらいながらも恵まれた幸せな家庭生活を過ごされてきたよう。

でも、最近になり持ち前のチャレンジ精神（例えば、20歳の時に足動式改造車の運転
免許の日本人第一号）からか、「わたしは、収入の安定より心の躍動を求めたいのです。」
と、安定した仕事である公務員を辞め、「わたしは、たまたま障害を持って生まれてきた
けれど、だからこそ貴重な体験ができたこともある。その生きようを伝えることで多くの
人が元気になるなら、知らない人たちの前でもしゃべってみたいと思うようになったので
す。挫折しても、からだが不自由であっても、まっすぐに人生を歩んでいけば、道は開け
るということを伝えたくなったのです。」と、再び「典子」として講演活動の生活を選ん
だ経過等に触れた手記の書籍であった。

「わたしは自分の意思をきちんと伝えられる人は障害者ではないと思っています。伝え
られない健常者は心の障害者だと思っています。障害を持っている人は障害者というレッ
テルに甘んじてはいけないのです。」と記しているだけに、本当に前向きに、何事にもチ
ャレンジしてきた様子が手記から伺える。

また、講演後の「一番苦勞されたことは？」の質問に、「スタッフや家族、目下の人に
限って『ご苦勞様』という言葉を使いますが、自分自身のことで苦勞という言葉を使った
ことはありません。心当たりがあるとすれば努力のことかなと思います。でも、努力する
ことを苦勞という言葉に置き換えたことはないですね。」と答えていることから推測する
と、苦勞したというより、その時々「今を大切に生きる」という姿勢で人生を楽しんでき
たよう。

これからの典子さんの生き様（よう）も、多くの方々に勇気を与えてくれることでは
しょう。

（2006年8月12日 記）